

古谷先生の御退官によせて

飯野 徹 雄 (植物学教室)

私達植物学教室では、内外の第一線の研究者をお招きし、幅広い分野における先端的な研究にじかに触れる機会を学生達に与えるための科目として、「生物科学セミナー」を実施しています。そして、御退官の先生方にはその一コマを当てて最終講義をお願いすることにしています。本年3月に古谷先生が停年で御退官されるに当たり、この「生物科学セミナー」をお願い致しましたところ「これからしたいこと——光情報による生体調節機構の解明」という演題を寄せられました。御停年に当たっても眼を将来の研究活動に向けたこの演題にこそ、古谷先生の真骨頂が現われているように思われます。常に先見的発想で、力のある限り前進する古谷先生にとっては、東大における停年は終結ではなく、新しい前進のための一区切りすぎないように思われます。

古谷先生は昭和24年3月に東京大学理学部植物学科を卒業された後、同大学院に進学され、故前川文夫教授のもとで昭和35年に理学博士の学位を受けられましたが、その途次より米国エール大学大学院に留学しPh. D.を受けられ、昭和37年秋からはハーバード大学のフェロウ、そして昭和38年秋からはブルークヘブン国立研究所所員というように、外国の大学・研究所を遍歴され、植物発生生理学者としての地歩を確立されると共に、国際人としてのセンスを我が物にされました。そして昭和40年に名古屋大学理学部助教授として7年ぶりに帰国され、昭和43年には東京大学理学部助教授として古巣に戻られ、翌年以降同教授として、植物学第三講座を担当され、この度の御停年を迎えるに至ったものです。このような遍歴の道程、古谷先生の言葉を借りれば「流浪の研究者」の御経歴が、この度の御退官をも、「研究のもう一つ

の一里塚」として位置付けておられるように思われます。

古谷先生はこの遍歴の期間を通じて、学問分野においても植物の形態学、生理学、発生学にわたる非常に広い視野を身につけられて、それを後進の育成に活かされ、また研究面では特に光環境情報による植物の形態形成や生体機能の調節機構をフィトクローム分子の動態に着目して解明し、国際的に我が国が誇るべき業績として高い評価を受けておられます。先に紹介した演題にみられますように、この研究課題は本学御退官後も畢生のお仕事として続けられてゆくことでしょう。

常に新しい道標を自ら作りながら進まざるにはいられないという古谷先生の意欲は、単に研究面ばかりでなく、研究・教育行政、学会活動において躍如たるものがありました。「古谷先生が動くとか何かが始まる」という評価は実に当を得ているように思われます。学園紛争終期に本学に着任され紛争後の植物学教室の体制確立を主導されたのは彼でしたし、特に情熱を注いでおられた理学部附属植物園の発展のために、園長として運営委員会を発足させ、将来計画案を設定し、さらに小石川植物園後援会を発足させたのも古谷先生でした。また、学外においても岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所の創設責任者を務められたり、日本発生生物学会、日本光生物学協会の創立に尽力されるなど、生物学会において「事起る所に古谷あり」といわれる程の目覚ましい御活躍でした。そして現在は国際植物学会議の日本招致準備委員会委員長として、持ち前の主導力を発揮しております。また御退官後も息つく間もなく、国際的研究プロジェクト計画のリーダーとして、御活躍を続けられると伺っております。

古谷先生のこうした御経歴をたどってみますと古谷先生にとってはこの度の停年御退官も些細なことであるかも知れません。しかしながら先生をお送りする私達にとっては、矢張り卓越した先輩

を身近から失うことに対して惜別の念を禁じ得ません。東大在職中の教育研究の幅広い面における御尽力に感謝すると共に、今後の国際的研究活動におけるますますの御発展を期待致します。